

子どもたちは私の先生

金沢大学大学院内地留学生 諸岡研究室 寺 岸 和 光

(2001. 3. 29)

私は小学校の教師ではありますが、大学院で学ぶ（平成11～12年度）中心的な場が本園の園長をされている諸岡先生の研究室であったというご縁があって、この2年間、本園の園内研修会に1～2回のペースで参加させていただきました。私のような畑違いの人間を快く受け入れて下さった諸岡先生はじめ本園の教職員 みなさんに感謝を込めて、この寄稿を書かせていただくことにしました。

大学院内地留学における学びの中心は私の研究領域である学級づくりであったわけですが、それに劣らぬもう一つの学びが「出会い」ということでした。大学の先生方はもちろん、若い学生たちや私のような現職の内地留学生、そして、本園の先生方といった大学外の場にいたるまで、教育現場では得難い出会いが私の狭い価値観をゆさぶり、視野を広げていきました。それに伴って、幼稚園・小学校・中学校の子どもたちとも出会う機会を得られたことがさらに私を育ててくれたように思います。「3歳も15歳も同じものをもっている」という気づきは、今後の教職人生に大きく影響していくことでしょう。その「同じもの」とは何なのか。多くの文献に目を通し、試行錯誤し、修士論文に苦悩した2年間の学びでしたが、私が得たものは実は非常に単純な事柄だったのではないかと考えています。それがこの「同じもの」です。その内容を以下の手紙を紹介することで書き残しておこうと思います。中学生への手紙がなぜ幼稚園研究紀要の寄稿となるのか、読んでいただいて感じ取っていただければと思います。

愛する志賀中学校・3年1組福本学級のみなさんへ

私は小学生の頃も中学生の頃も、行動力のある積極的な友達に調子を合わせながらついていくような、特徴のない子どもでした。勉強の方も平均点より少しばかりよかった程度ですし、授業中の発言も緊張して好きではありませんでした。つまり、どこから見ても自分に全く自信がなかったわけです。自分は魅力も可能性もない人間だと思いこんでいました。その証拠に、先生になりたいと思っていたわりには勉強が嫌いで、受験直前もラジオを聴いてボーっとしたり、映画を観に行ったりと、根気よく机に向かった記憶がありません。ひ弱な自分と向き合う自信がなかったんですね。こんな私ですから高校も大学も第1志望校は落ちました。（現在のみなさんには縁起でもない話で恐縮ですが）。しかも、勉強しなかったにも関わらず、その結果が悲しくてかなり泣きました。私立高校や私立大学の学費の負担を考えて、両親に申し訳ないという思いもあったように思います。この時、まるで人生のすべてが決まったような気持ちにもなりました。

ところが、高校も大学も周囲に知り合いがいなくなった分、それまでとは違った新世界が広がったのです。昨日の自分でなくてもいい空間、昨日の私を誰も知らない空間でした。周りに

合わせた自分でいなければならない理由がなくなりました。高校生時代には、学級委員にもなりましたし、応援団に入って甲子園にも行きました。修学旅行ではガイドさんに代ってマイクを独りじめして、学校の先生の物まね連発の大爆笑バスツアーの主演を務めたりしましたし、文化祭ではバンドを組んでリードボーカルもしました。

大学は県外でしたから、頼れる家族もない状況で私は私の生活を私の思いと責任でつくっていかねばならなくなりました。それまでスポーツに縁のなかった私が大学でアメリカンフットボール部に何の迷いもなく入部したことが象徴的です。ただ、やってみたかったからやってみた。言葉で理由を考えず、素直に自己決定した初めての経験だったように思います。ケガもよくしましたし、練習もつらかったですが、やめたいと思ったことはありませんでした。4年間やり遂げたことは今も自分の支えになっています。

小学校でも中学校でもなく、この16歳から21歳の日々が、私にとっての生きた本当の学校になりました。結局、私が出会った教師たちは、私のような存在感のない子どもの抱えている自信のなさやそのつらさに気づいてはくれなかったのです。優秀なわけでも問題を起こすでもなかった分、私は意識されない透明な存在でした。教室内のさまざまな能力の格差も硬直した差別もレッテルも放置したまま、テストの点数や表面的な言動だけで私の価値を評価する学校。だから私は教師になりたかった。できる子にできないことがあること、できない子にできることがあること、誰にもできないことがあること、教師にもできないことがあること、そして、できないのにステキに思ってしまうことがあること…価値のない人間などいないということを教師になって子どもたちに教えたかった。二十歳を過ぎて、私は教師になるために生まれて初めて真剣に勉強しました。

教師になってからは子ども第一主義の立場に立って、私は自分のやりたい活動を教室の中・外でどんどんやっていきました。今から思えば無茶もしましたし、足並みをそろえたい周りの先生方からは自分勝手だとも言われました。それにもかかわらず全く苦しくなかったのは、子どもたちが輝いていたからです。孤独ではなかったからです。隣の先生と仲良くするために子どもたちの活動を抑えることは、私にとって教師をやめることと同じでした。それでも狭い教室にながくいると、教師の考え方も狭くなりますから、子どもたちを自分のために振り回した時期もありました。ところがここでも、そんな私の未熟さや、他の先生方とつながることの大切さを教えてくれたのは結局、目の前の子どもたちでした。傲慢になっていた私の要求に誠実に応えようとする子どもたちの姿、それはとけてもとけても降り続く雪のように私の心の濁りを白く染めるのです。そして、子どもたちが自分の先生であることに気づいたのでした。それは6年ほど前のことです。

今、私は自信があります。自分に対してではなく、私の目の前にいる子どもたち1人1人の美しさにです。私の話を聴いてくれる人がいるから私は私でいられる。私の存在を認めてくれる人が私の生を支えてくれる。目の前の子どもたちの姿が私の未熟さを教えてくれるのです。そして、大学院生活における最大の学びは、そんな温かい思いを自分の担任する学級以外の子どもたちのなかに感じたことです。その1つが福本学級のみなさんでした。こんなにきれいな

中学生がいるんだなあって本当に思いました。

私はあなたたちに出会った。わずか2回だけ。それなのに、幸せだった。これは粉れもない事実！あなたたちと長く話合ったわけではないですよ。でも、少なくとも私があの時その教室にいることをあなたたちは許してくれていたでしょう。そして、素直な自分を見せてくれた。その空間のなかで私は幸せな温かい気持ちになった。

数学が苦手な人いるでしょ。逆上がりができない人いるでしょ。お母さんとよくケンカする人いるでしょ。将来が不安な人いるでしょ。告白できずに悩んでいる人いるでしょ。素直になれない人いるでしょ。福本学級が居心地よくない人いるでしょ。みんなあの頃の私と同じです。今の私と同じです。それなのに、あなたたちの心のなかも、名前すらも知らないままで私はあなたたちのなかで幸せだった。何ができるとか何ができないとか、そんなことを知らないまま、あなたたちがそこにいるだけで幸せな気持ちになった。うまくいっても失敗しても、できてもできなくても、持っていても持っていなくても、そんなこと関係なしに何も知らないまま、一緒にいるだけで人は誰かに幸せを贈ってしまっていることがあるんです。あなたたちのように。

読んでくれてありがとう。少し早いけど、卒業おめでとう。

担任にもどる私も4月から不安ですけど、福本学級の授業ビデオを応援歌にしてがんばります。子どもたちに育てられながら、未熟な私らしく。

2001.3.3 寺 岸 和 光

「自分づくり」「自分探し」ということばをよく耳にします。でもそれは、自分1人ではできないことなのだと思います。教師であっても親であっても大人であっても。誰かとの出会いのなかで、「私」は自分に出会っていく。出会いなしの人的成長は考えられないのではないのでしょうか。